

自分がいつ、おばさんになったかおぼえていないけれど、はじめておばさんと呼ばれたのは、たしか32年前、この村に住みはじめた26歳のときだった。裏に住むおばさんから、おばさんと呼ばれたとき、周りを見まわしてだれもいなかったのも、自分のことだと思った。

はじめて叔母さんになったのは31年前で、呼ばれたのは、おそらく初の姪っ子が口をきいた3年後くらいだったにちがいない。

はじめて伯母さんになったのは37年前で、呼ばれたのは、やはり初の甥っ子が口をきいた3年後くらいだったはずだ。

店のお客さんの中で、わたしをおばさんと呼ぶ若い男の子が何人かいる。呼ばれるたびに、自分は正真正銘のおばさんなのだと、だんだんトーンが落ちる。

しかし、不特定の人から、叔母さん、伯母さんとは、ぜったいに呼ばれない。

ここ数年、甥っ子や姪っ子が所帯をもち、それぞれの伴侶から、叔母さん、伯母さんと呼ばれることが多くなった。彼ら、彼女たちがきちんと漢字変換して発声するので、自分の耳も発声された漢字で受信する。

「伯母さん、お元気ですか？」と、若い女性から問われると、とたんに労わられる気持ちになるから不思議だ。

この夏も、姪っ子家族が来てくれて、おだやかな数日間をいっしょにすごした。東京消防庁の凛々しい消防士・K君30歳から「伯母さん、伯母さん」と呼ばれ、なんだか自分も、伯母さんというだいじな仕事についているような気持ちになり、つい「はい」と大声で返事をした。少々こそばゆいが、整列して敬礼でもしたくなる、新鮮な響きだった。